

校友會誌

第十三拾五號

大正五十一年三月

滋賀縣立彥根中學

目 次

- ◆ 口 繪
(大正十四年度卒業生第三十八回)
- ◆ 詔 書
- ◆ 校 歌
- 卷頭に題す
- ◆ 論 説
- 名實を論ず
- 久遠の生命
- 目覺めたる有色人種の挑戦
- 自己の改造
- 生き甲斐ある生活とする爲には
- 誠の生活とは
- 自修を怠る勿れ
- 知識階級の現代的任務
- 旅行趣味を普及せよ
- 生 命 論
- 自己表現とその形式

會長 内 田

澤 北 西 西 木 寺 岸 松 竹 名
川 居 澤 村 村 本 宮 中 番
效 四 郎 一 七 雄 作 次 康 誠 幸 二 郎 新 太 郎 謙 新 太 郎 幸 一 郎 荘 之 進

澤 井 謙 吉

- ◆ 文 范
- 來るべき大戰
- ある日の出来事
- 多賀の里雑感
- 靈仙山と其の傳説
- 人間の惱み
- 小 品
- 學生の風紀
- 海岸生活
- 短 文
- 夏の一 日
- 初秋の月
- 燕
- 月下の感
- 虫の聲
- 九月の夕
- 太陽の傾く時
- 小品一題
- 秋の一夜
- 蟬

末 宇 永 西 西 山 山 木 廣 廣 松 廣 廣 大 青
松 原 口 田 澤 居 澤 田 田 村 澜 澜 宮 澜 澜 谷 山
四 信 久 次 新 義 與 千 千 謙 義 義 誠 義 義 伍 庄 之 進
郎 三 彌 雄 藏 雄 作 里 里 次 景 景 一 景 景 平

○満し得ぬ喜び
○漫筆數言
○狂人
○歌を知らない
○歸り途
○鳴門で
○小さな農夫
○夏
○夏
○夏
○雨
○あらし
○よしよかCreation
○T先生
○夜の雨聲を聴く
○生き看板
○夏の湖上にて
○訣別
○起てよ彦中六百の健兒
○我輩は蟬である
○清潔検査

山木大 山大上宮大坂中高北兒西知須河廣岸
岸村谷 口谷田川島本川祖村玉澤田山村瀬本
謙伍 彌彌小平治義至善太郎英一郎
巖次平 平治雄卯衛門誠一郎
平治雄爾藏一郎
平治雄哲藏一郎
景郎

○何となく
○水 郷
○綠葉の中
○雜
○水 泡
○無題集
○あゝ若き日を
○夕
○水 泡
○大正十四年
○月
○川
○立
○立
○故郷
○今日もまた
○夏の日
○石場ヶ濱應援記と余の感想副團長

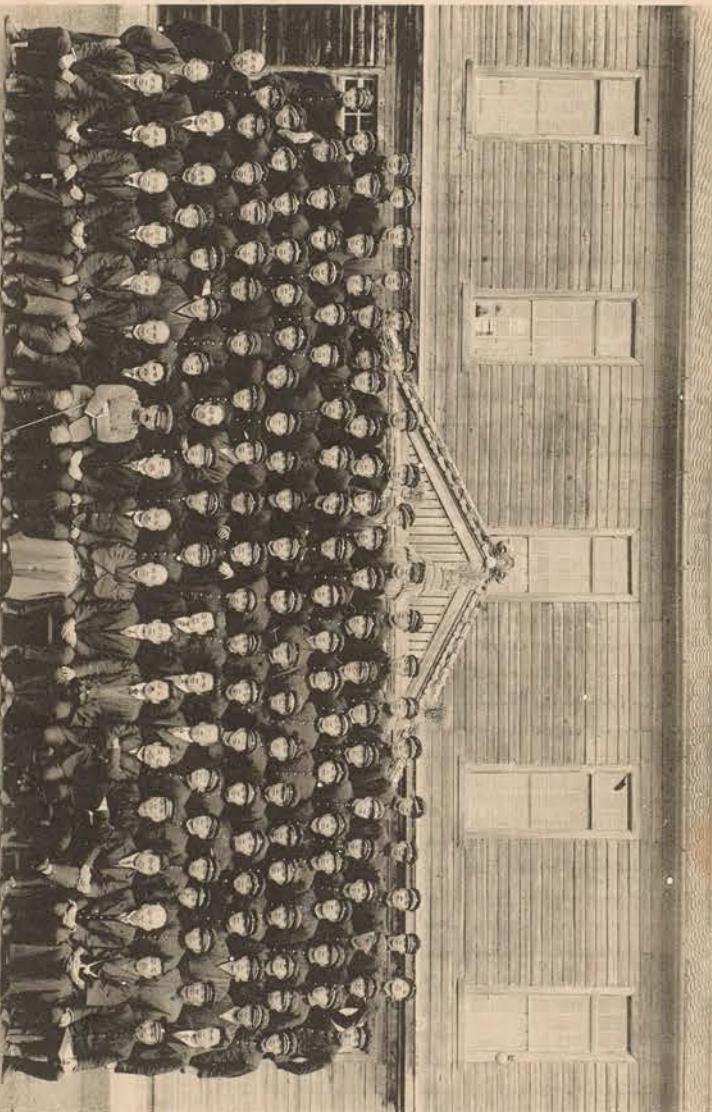
吉居北 小西田大木松 茶高中高澤北永
田長村菅澤中西村宮 木橋川祖村田
謙誠 準 謙誠 伊三郎
成英三郎 新之丞 新藏
成彌一郎 一渡次一

飯那高高山中高大澤居居坂漢北大大大深大知
村須橋橋口川祖島井長長見見本村村橋橋橋橋
天凌次次彌英善太郎英三郎吉謙彌一
祐岳郎郎平一保郎平一保郎平一保郎
誠了郎造造造陸順一

○首
○海邊夏
○夕べの橋立
○布引の瀧
○雨の道を
○田舎の朝
○鈴木先生を迎へて
○紀行文
○橋立紀行
○第五學年旅行記
○第三學年旅行記
○橋立紀行
○第一學年旅行記

特別會員 白鳴子
大鳥居 高山齊吉辻藤佐
村庭長祖本田田田竹
季三英三郎邦善貞捨次
彦博三雄成七成一
孝太郎祐三雄博次次修

柔 水 野 庭 道 上 球 球 競 技 部 部 部 部 部
○
文 陸 上 競 技 部 部 部 部 部 部 部
雜 錄 庫 部 部 部 部 部 部
◆
○ 學 校 日 誌 摘 要
○ 會 計 精 算 報 告
○ 編 輯 餘 錄





詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道徳ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ効果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕卽位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツチヤ是レ實ニ上下協戮

振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十一年十一月十日

彦根中學校々歌

湖べの春にかざられて
雲ふきはらふ膽吹山
ふもとの若葉あたらしく
われらが園はかゞやけり
縁しづけき學びやに
智徳のとぼそ啓きつゝ
明はなれゆく人の世の
われらが窓に光あり
不撓の決意と力行の
わかき生命にまもられて
幸とはまれに美はしく
われらが園はかゞやけり

剛健自助の門によりて
湖畔のまもり嚴かに
たてる金龜の學びやの
ああほまれある幾春秋
金剛不壞のこゝろもて
つとめ勤しむ森のかげ
われらが窓の燐爛と
ああほまれある幾春秋
天のかゞやき地に享けて
こゝろ澄みたる琵琶の湖
金龜の春ととこしへに
われらが園は新たなり

彦根中學校校歌

ヘ調四分ノ四拍子

1=96

5 5 1 . 5 | 3 2 1 - | 5 1 2 3 . 1 | 5 - - 0 |

ウミベノ ハルニ カザラレー テ
みどりし づけきト マナビカウヤー に
フダフノ サダト カリツカウヤー ノ
がうけん じじょの ヨニヨリ

6 6 5 . 5 | 4 4 2 - | 5 3 . 2 1 2 | 3 - - 0 |

キの フラ フ 一 キつ ヤ
モと フラ そ ラ ひ ラ つ
カキ そ ナ ボ マ ラ つ
はん ま す も モ ラ そ
こ お ま す ゴ ラ そ

5 5 3 7 | 1 2 5 - | 1 2 3 4 . 3 | 2 - - 0 |

ノカバ シー クの
トはト リア ハシ
あサ レウ ハシ
モケチ ノハ シー
たてる ンキ の クの
ト ト ト ト ト

f
5 5 3 . 5 | 6 6 5 - | 1 2 3 . 2 | 1 - - 0 |

カガケ
ソノハ
ソノハ
カガケ
ソノハ
ソノハ
カリリ
カリヤ
カリヤ
カリ
カリ
カリ
秋

先に安河内校長をお送りして、我等本校職員生徒一同寂寥の感を抱く折から近く八日市中學より、わが内田校長先生をお迎へすることへなつた。これ我等一同の欣喜に堪へざる處である。

憶ふに我が内田校長先生は夙に聲望、都鄙にあまねき名校長である、仄に聞く、先生の當に八日市中學を去られんとするや、同校職員生徒一同は云ふも更なり町民亦擧つて惜別の情に堪はず、乃ち町會を開き滿場一致決議のもとに記念品を贈呈し且つ祖道の宴を張り、大いに先生の行を盛にしたと云ふ事である。一日先生に乞ふて八日市町長横畠氏の先生に、記念品にそへて贈りし感謝狀を得、幸ひこゝに登載するの榮を見た若しそれ之を讀むもの、先生御高徳の一端を覗ひ知り、爾後、先生を校長として戴く我等の幸福を思ひ、本校々運の發展向上を計ること共に、層々自覺勉勵せば我等同人の微意足れりと言ふべきである。

本縣立八日市中學校長内田亭氏ハ突如縣立彦根中學校長ニ榮轉セラレタリキ。是レ氏ノ爲ニ賀スベク慶スベキノ事タリト雖モ我等頓ニ其ノ慈親モ啻ナラザル名校長ヲ失ヒタルノ思ヒヲ致シ切ニ氏ノ去ラル、ヲ歎惜スルモノハ抑々所以アリ義ニ氏ノ本校ニ代任セラル、ヤ今ヲ去ル五年前創立日猶淺ク校舍内外ノ設備未ダ全力ラス内容漸ク整ハントスルノ秋ニ方リ徐々善ヲ施シ緩急其ノ節ヲ失ハズ寛厚以テ教職員ヲ督勵シ恪勤以テ校務ヲ處理シ恩愛以テ生徒ヲ薰陶シ能ク風教ノ振肅ニ努メラル殊ニ義勇質實ノ校訓ハ凜乎トシテ冒スベカラズ而シテ其ノ學風ハ夙ニ鄉間ノ痛ク感激スル所ニテ世間既ニ定評アリ惟フニ八日市中學校ハ地方人士多年ノ熱望ニヨリ遂ニ創設セラレタルモノ教育成果良否ハ鄉黨ノ常ニ張目瞻視スル所克ク今日ノ如ク設備ヲ完成シ校風モ確立シ校運ノ隆昌ヲ招揃セルモノ殆ンド他ニ其ノ比ヲ見ズ是レ全ク氏ノ學深ク識高ク量寛ニ德大ニ世情ニ練熟セラル、ニアラズンバ焉ゾ克ク斯ノ如クナルヲ得ンヤ本校所在地タル本町亦氏ガ教化ヲ享クル所尠カラス本日祖道ノ宴ヲ開催スルノ期ニ會シ茲ニ記念品ヲ贈呈シ以テ町民一同ハ微意ノ存スル所ヲ告ゲントス希クハ之ヲ諒トセラレンコトヲ

大正十四年七月四日

滋賀縣神崎郡八日市町長 橫 畑 耕 夫

卷頭に題す

會長 内田亭

一搏鶴鳴萬象醒む。日華卿雲に御して爛たり。

堯天も何かは、舜日亦明なりと爲さず。無窮への第二千五百八十六歩、大正十五年元旦を
鶴鳴く。

第一聲 自覺せよ。

第二聲 希望に生きよ。

第三聲 努力即ち善。

孟子曰はく、鶴鳴きて起き、孳孳として善を

爲すは舜の徒なりと。

歲新にして心自ら維新なり。黎明に立てる健

兒よ。勉旃。勉旃。

彦根中學校校友會誌 第三十五號

論 説

名實を論ず

名 煙 荣 一



官に在りて賓客門に滿ち、罷めて門外雀羅を張ること、由來支那に最も著しとす。唯器與名、不可不以假人といひ、慎器與名、不可不以假人といひ、名器を重んずるは、歴代を通じて替はらざりし所なり。大臣たり、道臺たれば此官名の爲には殆んど爲し得ざるはなく、教育を受くる者も、唯其試験に及第し一官を贏ち得ん事を切に望む。されど亦名の頼むに足らざるも知られ、名ありて實なきよりは、名なくして實あるを擇べるあり。大臣として威風堂々たりながら、一旦事ありて周章狼狽爲す所を知らざる、亦代として之れなきにあらず。彼の乱の小なれば出でて將、入りて相、名臣として仰がるれど、亂の大なれば、君主をして徒らに二十四郡一人の義士なきかの歎聲を發せしむる、誠に膚甲斐なきの限りにて、斯く有名無實なるの多きと共に、野に無名有實なるの隠れ、又有名無實の徒輩の跋扈せるを憤るものあり。曰く彼何人ぞ、我れは何人ぞ、我れ豈に才に於て彼に劣らんや、彼の高位高官に誇るは噴飯すべきのみ、茲に風雲起れば王侯將相なきの知らるど。眞骨男兒の意氣實にこゝに在り。夫れ又官に在ると否とにて境遇の著しく變するは、特に支那に見る所なるが、是れ其の古代より國政の大に變改せざりしが爲めにして、往昔に遡れば國として然

らざるなし、名譽と云へば名は官位爵祿の類に限り、名譽は臣民の授受すべきに非ずとせしなるが、名利と云へば斯く意義の狭からず、官位爵祿を含むも、同時に世間の漠然たる名聞をも指す、支那の專制的にして山水に放浪するを高士とするは、少しく矛盾するに似たれど其の專制的なるは文字通りならず、境域の廣く人口の多く、長鞭も馬腹に及ばず、別天地の存し、或は故に之に離るゝを得策とせり、されど專制は專制たるに相違なく、大多數は官に就くと官を去ることを以つて榮辱を判定し去る、歐州は此れと事情を異にし、官爵の名譽は殆んど政界に限られ宗教界に特別の名譽あり、工業界に特別の名譽あり、諸階級に各々特別の名譽あり、以て自ら安んずるに足る、殊に米國に於ては官尊の大いに減じ、大統領たるご鋼鐵王、若くは鐵道王たると相匹敵することあり、國情の異なるれば名譽の種類の異なるも如何なる名譽にせよ、實力との關係の疑はれ、有名無實なるは自らの位置を固守し、他の接近し来るを排斥するに務め、無名有實なるは益々進取を事とし、他の位置を取りて代はらんとし、或は別の方面より之を凌駕せんとす、之れの葛藤なり。小功に小賞あり、大功に大賞ある筈なれど信賞必罰の困難なるの夙に認められ、小功にして大賞なる、大功にして小賞なる、往々にして免れず、閥流の破れて實力を圖はすの時、論功行賞の偏頗を極むるに至らざるも、世治りて形式のなり夤縁の如何にて黜陟せらるれば、實力を恃む者は下位に雌伏するに堪へず、官位にあるよりも官位なきを欲す。藤原氏の權を擅にせる、他姓を視る事奴僕の如く、源氏の意氣を負ふ者、藤氏の力なくして傲る不快に慨し馬を關東の野に驅りて、自由の生活を樂みき、唯だ幾代の習慣よりして、取りて代はらんとせず、専ら武藝を勵み、平安に、平治に、平氏のために破られしは、兵の弱かりしに非ず、政治を知らざりしに出づ。有名無實なる藤氏に次ぎ、有名無實なる平氏の權を占め、有名無實なるの看破せらるゝ、彼の源三位賴政が推子を拾ひて世を渡るかなと歌ひしを以て察すべし。賴朝の權を得たりしは、無名有實の有名無實を爲りしるが、之れに先んじ關東に兵馬を養ひし將軍は、皆無名有實にして武に明るく文に暗らく、束帶せる公家を拜すべしと教へられし儘に拜して何の怪む所なかりき。

平氏は軍人なりしも、京都にありて公家化せしが故に、公家の政策を踏襲し、攝政關白大政大臣といふ無上の榮譽とせしかど、源氏は然らず、家子郎黨と共に關東に居り關東の習俗に従ひ、別段に公家となるを欲せず、北條氏に至り、己れ自らは實權を收めて満足し朝廷より四位を賜はるも有りて可無くて可と心得たり、斯くて平安朝以來の官職は少しの價値なき名と化せしが、權を得ると共に名の伴ひ來り、執權以下、無名有實の有名有實となり而して世襲して遂には亦實力を失ひ、有名有實の有名無實となり茲に楠氏の崛起し、新田、足利諸氏の崛起し、北條氏を倒せるを見る。爾後戦國として群雄割據せるは、名の賴むに足らず、唯だ實力を圖はすの外なかりしなり。

又時移りて徳川幕府の倒れしは、伏見鳥羽に砲撃せられしよりも、何人も爲すべきを爲さず、威信を各藩の識者に失ひしによるなり。幕府の官吏は有名無實、幕府の事業は有名有實ならざるべからず。幕府の存在在其ものがある様に見受けれる。けれども少しく考へて見ればそれは大きな間違であると云ふ事が分る。

忠臣楠正成は、六百年の昔湊川で戦死した。又義貞、正行等も所謂名譽の戰死を遂げた。其の時彼等の肉体は無漸にも滅びたけれども、其の忠魂義膽は今日に至るまで何千人何萬人の心を感化してゐるではないか。彼等の生命は實に久遠の生命に外ならない。

久遠の生命

竹中康治郎

近來現實主義だの、利那主義だと云ふ様な思想が流行して、人の生命は後もなければ先もない、全く此の世限りのものであるから出来るだけ楽しく飲んだり、食つたりして一生を終るが良いと云ふ風に考へて居るものがある様に見受けれる。けれども少しく考へて見ればそれは大きな間違であると云ふ事が分る。

忠臣楠正成は、六百年の昔湊川で戦死した。又義貞、正行等も所謂名譽の戰死を遂げた。其の時彼等の肉体は無漸にも滅びたけれども、其の忠魂義膽は今日に至るまで何千人何萬人の心を感化してゐるではないか。彼等の生命は實に久遠の生命に外ならない。

之に反して彼の足利尊氏はどうであらうか。彼は生前に於ては立派な武將であつた、然しその死後はどうだ大惡無道の逆臣として、或は鞭うたれ、或は蹴飛ばされ、或は又啖唾をはきかけられて見るも悲惨な目に逢つて居るではないか。彼は死して地獄の生活に入つたのである。

人は永久に生きるものであることは此處を云つたものである。正成は永久に生き、義貞、正行も亦永久に生きる。尊氏も矢張り永久に生きて居る。其の肉体は亡びても其の活動は生きて我々の心に働いて居るのであるが兩者の間に其の生き方に於て非常な相違がある。正成等は彼等が生前の善行に依つて輝く久遠の生命を享け、尊氏は僅か現世七數年の慾に目がくらんで正道を踏み損つた爲めに數百年數千年否久遠の苦しみを得たのである。

「極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず」とは實に此處を云つたものであらう。生前に一日善行を行へば死後千年萬年経つとも其の善行は消滅する事なく、一日惡行を行へば死後千年萬年経つとも其の惡行は消れない。忠臣は依然として忠臣であり、逆賊は依然として逆賊である。

人はかかる久遠の生命的持主である。我々が母の胎内に宿つた時には無始無終の生命から始めて始ある生命に入ったのである。それから生れて此の世に出で、一生暮して死ねば無終の生命に再び歸る事となる。若しも我々が無終の生命にして價值あるものなれば、後の世の人に非常な福祿を授ける事となる、即ち此の現世に生れて來た暫くの間は言はゞ死後に於て大活動を爲す準備時代を見る事が出来る。されば我々が現世に在る時善行を多くすればする程、死後に於ての活動が目ざましいわけである。

要するに後世の人々の爲めに大なる思想を與ふべく此の世に於て極力善因を積まねばならぬ。

最後に日蓮上人の御言葉の中その最もり難いと思つて居る一節を述べて置かう。

「雲山の寒苦鳥は、寒苦にせめられ、夜明けなば、巢作らんと鳴くと云へども日出でねれば朝日の暖かるに眠り忘れて、又巣を造らずして一生虚しく鳴く、一切衆生も亦此くの如し」完

目覺めたる有色人種の挑戦

松 宮 誠 一

有色人種と白色人種の鬭争は最早論説のみにあらずして、實際に行つて居るものは決して少くない。

白色人種はアジアに於ける勢力を有色人種に驅逐されんとして居るのを非常に恐れて居る。

先づ我日本帝國は過去數十年間に世界の一等國に進み、强大なる陸海軍を養成して極東に於て商業上にも、外交上にも大に英米に對抗して居る。

又隣國の支那は近年に見ない所の大きな排外騒ぎを續けて居る。印度も又危険。エジプトも同様に長らく英國と紛議を續けて居るは過日、中野代議士の演説によつて一層詳かであろう。或は米國に於ても人種問題で當局は頭を悩して居る。殊に亞弗利加に於てはモロッコ問題でヨーロッパ人と土人が争つて、土着民は平常訓練して呉れたヨーロッパ人を敗かして居る。世界に於て數字から言つても白色人種は不利な場合に居る。五億餘の白人に對し十一億餘の有色人、白人の居住地が世界の五分の二に對し有色人は五分の三を占めて居る。

而して近年まで白人に支配されたる有色人は白人の爲めに奪はれたる土地を奪回する爲めに科學上に於ても商業上に於ても所有方面に於て白人に挑戦して有利な結果を常に得て居る。

明治三十七八年日露戰爭に於て日本が強國露西亞を打ち破つた事は單に日本が五大強國の一に列した許りでなく、一般有色人の白人に對する恐怖觀念をば打捨て多大の自信を得させたのである。

歐洲大戰中に於て、白人同士が互ひに喧嘩をやつて居る時に於て、有色人は絶対に其成行を靜觀し且研究して非常に利益を得た。モロッコの叛將アブド、エル、クリムは佛蘭西及び西班牙の士官學校を卒業したそうだが今や亞弗利加の一角モロッコに於て彼を教へた人々を打ち破り、佛西聯合軍は武器に於ても兵力に於ても貧弱なるリフ族に散々打撃まされてゐるではないか。有色人が白人に挑戦する意志は多分に彼等の間に養

成せられて居るが其原因は先づ第一に印刷術の完全になつた事で、是に由つて國家主義者、民族自決主義者の最も有用な物となり國語に印刷されて普く國內に配布され、是を助くるに汽車、汽船、或は飛行機と言ふ交通機關の發達を以てし、是で有色人はよく西洋文明を了解し、且東西兩洋の人種同權を確信したのである。白人が有色人に教へた文明は斯くの如き結果を生じたのである。有色人の整頓され訓練されて、西洋文明の破壊に向ふ大聯盟軍!!想像するも大なる事ではないか。

但歐米諸國が冷靜に考へたならば此様な事はないだろうが若し彼等白人が癡見を以て進むならば其處には恐しい戦争の原因を生ずるかも知れない。

即ちそれは征服者と被征服者の争鬭、力と権利の争ひ、言ひ換ふれば偶像教と基督教との争である。

尙最後に一言したき事は現在日本は最も密接な關係のある隣國支那と宛も佛獨の如き關係にある。講和會議中に於ても支那問題が最も困難であつたそうである。で我等は支那人をよく理解して且自ら進んで握手すべきである事を忘れてはならない。

自己の改造

岸本幸二郎

改造。其れは世界を擧げての叫びです。捉はれた因襲から脱し、不自然な拘束や垣根を撤して、そこに自由な、公正な、眞實な天地を構成し、人間生活の充實と向上とを企圖せんとするいとも底力のある有意義な叫びであります。

我々は此の意味に於てあらゆる方面に、改造の鐵錐を下さねばなりません、手に唾して其の目的を貫徹せねばならないのです。けれども、私は其の第一義として先づ其の根本主体である「自己の改造」それからせねばならぬと絶叫するものであります。如何に形式が改まり制度が變更されたからとて、大切な各人の自己その

ものが新しく生れ出ねば何にもならぬではありませんか。

あの誤った自由論絶叫者や不徹底な改造論者程世に有毒なものはありますまい。それ故、私は聲を大きくして云ひたい。「改造を叫ぶ前に先づ以て自ら改めることにつとめよ。偏狭なる自我を棄て、全我の聲に眼醒めよ」と。更に云ひたい、「自分で作つた小さな自我の束縛さへ脱却し得ないものが、何でより大いなる他の堅壘や拘束を突破して、正しくも美しい天地を建設し、徹底した眞生活が爲し得られやうぞ」と。

生甲斐ある生活をする爲には

寺村新太郎

日輝けば露は消ゆ風吹けば花は散る。それにも似たる定めなき人の世に、富の榮や權力の華や果して幾時の久しきを保つであらうか。

強き男も優しき女も時來れば凡て老い衰へ遂には果敢なく此の世を去らねばならない。

一切世間に於て生るものは壽命の無量を願ふども必ず盡きる時がある。

夫れ盛なる者は必ず衰へ會ふ者は必ず別れる。

壯年も久しく停らず、盛なる色も病に侵さる。

嗚呼此の夢の如き榮此の露の如き命をして眞に意義あるものにならしむるには如何にすべきか。

生甲斐ある生活!! それは何を意味するのであらう。生甲斐ある生活とは、自由な空氣の中に充分な自我の表現の可能な生活をいふのである。

人生には保守と進歩との二つが働きかける。保守は人間を後へ引き戻し、進歩は進めて行く。

保守にのみ依頼すると、其行く先は死滅である。

死滅に打克つて我々が生活を持続する爲には、習慣や規則からの解放に由る自由な天地と、自由な天地にのみ生れ出づる自我の表現と創造の喜びとがなくてはならぬ。吾人は進歩主義をこり自由と創造とを驅使すべきである。自我の表現は自我の進出である。自我の進出は自己の制限せられた狭い殻を破つて、廣い解放せられた生活に入る事である。而して他人の生活を生き、他人の感情を経験する事に初まらねばならぬ。生甲斐ある生活は決して物質的な生活様式に由て左右されない。たゞへ其人が貧賤なる人にもせよ彼は實に素晴らしい小論文に、詩に由つて永遠に生くるの道を拓く事が出来る。心に平和があり、感激があり、そして物に由て支配せられる事さへなかつたなら即自己發見をしたならば其人はハムレットが述べたやうに

「よしや胡桃の中に鎖されてゐても、無限の空間の主とも己れを考へる事が出来よう。」

生甲斐ある生活をする爲には詩の生活が必要である。詩は吾人の友達であり、慰安者であり、指導者である

そして迷へる人に光明を與へ、弱き人に力を與へる。

詩が、廣く民衆の間に要求せられつゝある現時の一特徴は即ち生甲斐ある生活を求める聲の反映である。詩は狭い自我の解放者である。そして廣い自我の培養者である。詩は人生の全身的な表現であり、魂の経験の記録である。

詩は我々の經驗し得ない經驗を感じ、我々の魂の位置を知り、我々に全身全靈的な氣分を味はせるものである。無論詩に於て見る經驗は、到底自ら其境に臨んだ體験の充實さに及ばない。然し我々の體験には限がある。

かの大震災の如き殘虐の恐ろしさを體驗して、而かも人生を享樂し得るものがあらうか。詩人の偉大な詩に接する。其はやがて詩人の偉大な魂に接することである。そして我々自身の魂がどんな所

に低回してゐるか、どんな些末な事柄に惱まされてゐるか、其を悟り、其に氣付く事である。其が即ち我々の魂の飛躍である。

吾人は詩に由て小兒の心に立歸り其心を我々生活の間に取戻さねばならぬ。其が生甲斐ある生活をする事である。我々の生ぬるい生活は詩に由て、小兒の心に立歸る事に由て救はれる。

吾人は詩に由て本心に歸り自然の大靈に接觸することが出来る。

詩の生活が感興の生活であり、生甲斐ある生活である。

詩に生き得るものは

一粒の砂の中に世界を観じ

一莖の野花の中に天上を看

たなごころに無限を握り

一時に永遠を掴む

ことが出来るのである。

誠 の 生 活 こ は

寺 村 新 太 郎

露國の首都ペトログラードより程遠からぬ海上にアランド群島といふ一群島がある。其島の一に巖石を以て疊み上げた牢獄が建設されてある。其牢獄には國事犯の罪人のみを收容して居たのであるが、是等の罪人は全く世間より隔離せられ、青き空を仰ぐ事すら出來なかつた。其が爲是等罪人の精神は次第々々に憂鬱となり、中には發狂して自ら其前額を巖石に打碎きて自殺し、或は自分の衣服を引裂きて、それで縊死する者もあり、實に悲惨なる状態であつた。於茲乎露國政府は彼等に對し何等かの慰藉を與ふる必要を感じて『一日一度だけは好きな事をさせて遣るから遠慮なく希望をいへ』と申渡した。所が殆んど一同言ひ合せた如く『草花の世話をさせて戴きたい』と申し出たさうである。

實に自然の美はどん心を和らげ、邪なる心を直す力を持つてゐるものはない。如何に荒くれた心と雖天眞なる野の花の優しき微笑に對する時は、自然と氣が和らぎ、如何に憂鬱の悶に陥つた時でも爛漫たる姿に向へば忽ち快活となるのである。

彼等囚人等が希望を問はれた時、花に接したいと答へたのも無理からぬことである。自然は邪なる人間の心を正し、荒くれた心を濕して、正しい生活に引戻す力を有してゐるのである。かの上杉謙信は人の領土を掠奪する事を職業とし、人を殺す事を無上の愉快とした戰國の世の武將であつたが、彼一度能州に攻め入つて石動山の玲瓏たる月を仰いだ時には有名な詩を残して居る。

霜滿軍營秋氣清 數行過雁月三更

越山併得能州景 遠征

此歌つた。人の命をることも、人の領土を奪ふ事も平氣であり得た戰國の世の武將も、時しも照り輝く石動山の月を眺めた時、思は遠く家郷に飛んだのである。此時彼の荒くれた心は忽ち人間の本心に立歸つたのである。

如斯自然は、荒くれた心を濕し邪なる心を正す強い力を有するものである。然らばどうして自然は如斯力を有するのであらうか。思ふに自然が如斯力を有する根本は實に自然美のいつはりなき處に存するのである。若しも玲瓏たる月は唯富者の庭のみを照し、貧者の窓には其光を送らなかつたならば、これほど萬人の心を動かす力はないであらう。玲瓏たる月は塵高き貧者の破窓をも照し敗殘のむろ横たへた墳墓の上にも光を送るのである。即ち自然が人の心を動かすこと如斯絶大なる根本の理由は自然の美が神の如く誠であるといふ所にあるのである。

謡曲に羽衣といふのがある。かの天女が羽衣を忘れ漁師の伯龍に拾はれた。天女はどうか其衣を返し給はれるのである。

といった。伯龍は答へて、昔に聞く天人の舞を舞ひ給はゞ返して與へんと云つた。すると天女は先其衣を返し給へといつた、伯龍更に此の衣を返したなら天に返り給ふだらうといつた。天女は之に答へて『疑は人間に在り、天にいつはりなきものを』といつた。この言葉こそ實に意味深長である。いつはりなき天の誠こそ萬人の心を動かす力あるものである。

其處で私は考へたい。自然は神の造つたものであり、人間も亦神によつて造られたものである。自然の美に荒くれた心を濕はし、邪なる心を正す力ありとすれば、同じ神の造つた人間美にも萬人の心を動す力がなければならない。然し事實に於て自然の力は人間の力に優るやうであるが、吾人は人間も眞に誠の生活に入つた時には、萬人を動かす力が出てくると信する者である。私は太陽をながめ其偉大な力を感ずるのである。

一度太陽が輝けば、かの結氷して航海も絶いた北冰洋も又一步も入る能はざる高山の雪も、忽ち溶解し、水つた海は船を通じ、高嶺の雪は清き谷川の流と化するのである。もしも、吾人に萬物を化する太陽の様な純眞な熱情さへあつたなら、きっと万物を動かす力が出るに相違ない。

又太陽は吾々に寛大である。あの漂渺たる大海の水の中からも、泥濘の中からも、太陽は等しく純なる水蒸氣を吸收し、之を雲となし、雨となし、純白な雪となすのである。吾等も太陽のそれの如く寛大であつたら人心を得る事も決して難くはなからう。しかしこの熱と寛大とはとくに体得し難いものである。そしてこの熱と寛大とを体得し難からしめる尤も顯著なるものは遺傳と境遇との力である。實際遺傳の力は恐るべきであるが然し是が人生の凡てではない。善人にも惡人の子があり、惡人にも善人の子がある。歴史上自己の努力によつて、遺傳を征服し偉大なる功業を成し遂げた者は尠くない。

かのナポレオンを見よ。彼は遺傳の系統から言へば降服者の子である。然し彼自らの努力によつて彼の如き征服者となり得たのである。遺傳は決して人生を支配する最後の力ではない。

境遇と雖亦然りである。かのリンコーンを見よ。彼は赤貧洗ふが如き山稼の家に生れたのである。従つて八九才にして初めて小学校に入學したがそれも僅に九ヶ月で退學してしまつた。其後彼は日々勞働して少しの資金を得て之を貯へて本を買つた。斯くして得たる知識は積り積つて彼をして大統領たらしめたのであつた斯の如く見てくると吾々は遺傳を征服し、境遇に逆ひ、最高の理想に到達し得べき力を神より與へられて居る事を自覺しなければならない。

私は言ひたい。「我に最高の理想を與へよ、然らずんば何物をも與ふる勿れ」。若し生氣ある人間らしき人間たらむと欲するならば先づ自己の慾念を征服し、何物にも降服せざる生活を實現しなければならない。而して絶ゆず最高の理想に向つて猛進しなければならない。

吾々はかの耶穌の生活を見る時、必ずやかれの生活は熱と寛大との生活即ち誠の生活であつたことを知るであらう。獨り耶穌ばかりではない、歴史上の偉人は皆この誠の生活を營んだものである。

誠の生活に入り得れば、吾々の靈感は至大至高の宇宙精神を統合し生活そのものが直に宇宙精神と融和するのである。

自修を怠る勿れ

木 村 謙 次

自己修養を自修と言ふ。人の學校に入り、師に就きて學修する所は唯その基礎に過ぎず。小學に於てすら自修心の厚薄に依りて大なる差を生ず、況や中學、高等、大學に於てをや。古より學校を出でて直ちに大學者となり、大事業家となり、大醫となり、大發明家となりたる人あるを聞かず。然るに之に反して大學を出でずして大學者となり、大事業家となり、大醫となり、大發明をなしたる人は枚舉に違なきなり。

然らば自修の效の如何に大なるかを想像し得べし。

然るに我が國に於ては學問は學校に於いてのみなすべきもの、讀書は學生時代に限るが如く考ふるもの多きは實に遺憾なり。孔子曰く『學んで思はざれば罔く思ふて學ばざれば殆し』と、此の思ふとは自修の意なり、保守主義の支那に於て進歩發展を卑しむ三千年の古代にも哲人は斯の如く喝破せり。况や二十世紀、世界大變革時代に於ける我等にして自修を怠るものあらば數年ならずして競争場裡の廢物となり畢らんのみ鳴呼、自修すべきかな、自修とは心身共に智識、道德、体力共に並び修養し以て圓滿なる進歩向上を求むるの意なり。人間の腦力は修養に依りて限なく進歩するものなり、体力は修養を怠らば次第に退歩すべきものなり。故に我等は常に修養を怠らず腦力を進め体力を維持すべきなり。

然らば修養の第一たる腦力の修養は之を如何にせんか。世界の大勢に後れざらんが爲、絶ゆず讀書し、研究思考すべきなり。修養は必ずしも讀書に限らざれども之に依れば最も得易く、最も爲し易ければなり。

人若し學校卒業後も猶讀書を絶たず、數年を経過せば必ず生涯の讀書癖を爲すに至らん。此の癖こそは人を向上に導き、他日玉ご爲すべき必勝癖なり。然るに中等學校卒業者など職を實業界に奉ずる身であり乍ら昇進の見込なしと稱するもの甚だ多きが如し。之れ自修を知らざる自暴自棄者なり。自ら修養して高校出身の實力を養ふべし。實力の前に何かあらんや。此の時に當り猶ほ修養を怠り、實力戰を思はざる者は天下の愚物なり。

諸君自修の基礎は中學校に於て充分に之を得らる。卒業後自修を怠らずんば其の進展限りなかるべし。疑ふ勿れ、成金夢想時代は既に去りて再び來らず、實力奮闘戰時代は將に面前に展開せんとす。乞ふ自修を怠る勿れ。

知識階級の現代的任務

西 澤 與 作

目まぐるしい程移り變る世の中、この世の中人間苦と社會苦に焦り、躁き、惱み、苦しみ、泣き、鬪ふ多くの吾が同胞よ、これが現代社會の悲痛な實相であるとは。吾等は共に共に固き心の結束を以て社會改造の爲に奮闘せなければならぬ。

單に勞働者を資本家より解放し、小作人を地主より解放し、婦人を男子より解放すれば、それで濁れる社會が直ちに清まる様に思はれては居らぬか。若しもさうであるとすれば、そは手段と目的とを混淆するもので其一を知つて、未だ其二を知らざる短見である。縛られてゐる哀れなる者の繩を解いてやるはよい。然し解いた上で其人を何處へ連れて行かんとするのか實に心細い話しではないか。かくては社會の改善、人類の清福は増加せられることはないだらう。

先づ現代人心理の最も著しき特徴は「愛新性」の極端なあらはれである。すべて新しきものは、ただ新しきが爲に歓迎せられ、尊重せられて、價值判断の標準がすべて新しい物に片寄つてゐる様に思はれる。

そもそも「新しいといふ意識」は變化欲を前定するものであつて、如何に新しいものも、永久繼續するうちには自然その新しさを失ふが故に、新しきを欲する心は常に動搖する不安定の心である。然るに現代に於ては「矢鱈に新しがる念」に動かされて、變化の價值如何を顧慮することなく、單に變化の爲の變化、即ち變化の一時的快感を味ふ爲に新奇を求めて、かくの如く現代の多くの人心が波上の木片の如く流れ漂ひ何等自己の衷心に頼るべきものを持たずしてひたすら社會の潮流に翻弄せられたる時に於て、其の思想が詭激に走り、其生活の浮華に趨くは、實に當然の経路である。殊に現代の流行は、その種類の多きこと、一般的にすべての階級に行はれること、變動の迅速なる點に於て、他の如何なる時代にも見るべからざる特徴を有し、婦人の服裝竝に化粧の如き、最もよくこの特徴を發揮してゐる。かくて現代劇甚の流行ご、亂暴の奢侈とは其の國民の精神を毒し、其社會生活の安全を脅威してゐるのである。嗚呼何んたる呪ふべき誠むべき世相ではないか。畏くも 聖上茲に深く御軫念あらせられて、一昨年十一月十日「國民精神作興に

關する御詔書」を下され親しく國民を御懇諭遊ばされたのである。我等國民は之を拜讀して恐懼措く能はざる所である。

私は現代の社會世相を通觀する毎に、切に知識階級の奮起を望ましには居られない、かくなつた以上すべての階級がその人道的義務、その國民的責任を自覺して、正義の實現を理想とし勇往邁進せなければならぬが而も知識階級は、理性階級であり、批判階級であり社會の羅針盤となつて民衆指導の責任を負ふのである。

實に社會の木鐸となつてその義務を遂行すべき大なる責任を有するのである。

現代は階級鬭争の熾烈なるは言ふ迄もないが、これは主として資產階級と無產階級との戰ひであつて、知識階級は殆んど全部第三者の地位に在るのである。近時資產者階級が優勢な支配階級の位を占めて、未だ幾許もならざるに、早くもその地位を争ふプロレタリヤ階級が發達し、最近無產政黨の產聲を聞くに至つた。今や砲聲殷々として階級戰の最中であるこのときに當つて知識階級は兩者の調和者となり批判者となつて公正圓滿に解決せしむる責務を有するのである。

若しも其の國の知識階級が、自己の重大な階級的責任を自覺せずして、有產階級の優勢なる時には、之に阿附し彼等に便利な學說を創造し、又無產階級が一たび勢を得れば、徒に彼等に有利な人生觀を振り廻はして何等定見なく操守がなかつたならば、その社會の樞軸は腐朽せりと云つても過言ではなからう。

吾等が信頼する我が國の知識階級は、外に向つては堂々と社會の公標正路を持示すると共に、内は家族と共に高雅にして充實したる生活を營み、以て危期に瀕せる現代文明を、早く健全の方面に轉換せしめる、最大の重任に當られんことをこゝに再び熱望する次第である。

抑々、我が明治維新の大革新が、諸外國に稀なる好成績を以て圓滑に行はれ、尊王攘夷を標榜したる當時の革命運動が、よくその目的を達して、着々開國進取の方向に道を轉じて、吾國をして今日あるを得しめしは當時の知識階級とも云ふべき下級武士によつて行はれ、當時の社會が全く書生天下となつたからである。

幸にして、我が知識階級がよく眞理と良心とに生き、その階級的任務を果し、吾が社會、吾が國家、ひいては世界の平和の爲に、舌端火を吐き、筆硯血を交ふるに到る迄勇奮健闘せられんこと三たびこゝに求めて筆を擋く。

一九二五、八、一〇

旅行趣味を普及せよ

西居義雄

一口に旅行と云ふけれども、旅行と云ふ中にも目的の如何に依つては、雑多の種類がある。商業上の取引を主眼としたあわたゞしい旅行もあらうし、學術研究を目的とした旅行も或は保養、物見遊山を主とした旅行もあらう。其の目的の相違するにつれて旅行の方法も著しく變つて来る事は言ふまでもない。今保養を主とした旅行について自分の経験と、多くの旅行家の意見とを基にしていろいろの心得を書いて見よう。日本人は至つて出不精な人間である。徳川時代に御伊勢詣、富士詣、三山がけ等いろいろの旅行團体が、あつても夫れは要するに一部の人に限られて居つた。徳川氏封建政治のためであつて、今日猶其の遺風が存して居るのである。出不精な日本人は体育に不熱心な國民である。これがため日本人の体力は、遙かに歐米人に劣り、元氣に於いても、到底歐米人に及ばないのである。東西五千年的青史が證明するが如くに体力劣等の國民には進取の氣象が乏しいのである。

進取の氣象に乏しい國民よりなる國家は國民的生存競争に負けて、終には滅亡するのである。今や日本人は國民体力の上に於て、危急存亡の秋に臨んでをるのである。我が國をして、この状態より救ふの途は國民體育の大業を徹底的に實行するにある。

國民の體育向上、國民精神の美的陶冶の目的を貫徹せしむる一法は、國民に旅行趣味を鼓吹するにある。歐米人は寸暇を利用して一家打ち揃つて、遠足もすれば旅行もする。我が國民も歐米人の如く、一家打ち揃つ

て、愉快なる遠足・楽しい旅行を試みるやうにならねばならぬ。少なくとも子供が中學へ通ふようになつたならば旅をさせなければならぬ。

旅行は体力を向上せしめ、精神を美的に陶冶し、知識を廣くし、趣味を深からしむる效果があるのである。云ふ迄もなく社會生活が複雑になるにつれて、精神に慰安を與へるの途を大いに講じなければならぬ。

旅行をして山川自然の風景に接すること程精神に慰安を與へるものは他に其の比を見ないのである。世の中が文明的に進むれば進む程保養的旅行が必要になつてくるのである。私は家族的保養旅行を國民的習慣たらしめんとして居る一人である。

如何に保養を目的とする旅行なりとは云へ、之を愉快に、有益になさんとするには相當の準備を要する。

唯一人での旅か或は仲よい友達同志の旅ならば、準備もそこそここにして芭蕉式の行脚を試みるもよからうし『是れは諸國一見の僧にて候』式の浮世ばなれした旅行もよからう。或は彌次喜太式の旅行もよからうが家族的の旅行とすれば少なくとも相當の準備を要する。

生 命 論

北川四郎七

朝起きる。顔を洗ひ飯を食ひそして机に向ふ。面白い事が有ればドツと笑ひ、悲しい事が有れば打ち沈む此の如くして尊き人生を送る。此の間何等かの目的があらうか。彼岸に光明を認める事ができようか。そして又萬物の靈長と自稱することが當つて居ろうか。

抑も／＼人はどもすると自分の性格と反対の事を却つて好むことあると私は考へる。例へば一寸繪を見ても心の煩雜なる人は淡白なのを好み、律義な人は時として乱雜な事を選ぶ。此の事實は人間としてありうることだと思ふ。此の理で自分は今人間らしい人生といふものが送れて居るだろうか、我ながら惑ふのである

故に今此の如きものを書きたくなる。どうしても仕方がない。

慾の有るのは生物の常であつて少しも珍らしくもなければ不思議でもない、併し慾には自分の考へる所二つあると信する。其の一は生命といふものに立脚して起つて来る慾である。其の二は唯慾の爲の慾である。此の二つで人間と動物との區別が出来るのである。

第二の慾の爲の慾はゞ自分は詰らぬものは無いと思ふ。何となれば人生五十年を藻搔き藻搔いて慾の爲の慾を得んとする。併し日月は流水の如く且壽命には限りがあり、生を受けた以上何時かは死途に就かねばならぬ。而して其の死に臨んだ時に「嗚呼詰らない人生であつた。過去何を爲して來たのか薩張り分らぬ。」とかの五十年間の藻搔の生活を全部否定する。此の如き有様では實に人間としての價値がない。畢竟第二の慾の爲の慾に藻搔いて貴い自己を破滅に導いたのであると云はねばならぬ。

自分は考へる、「嗚呼先づくこれで自分も生き甲斐ある人生を送つた。兎にも角にも赤裸々に神の前、エシマ大王の前へ出ることが出来る。」と死際にこれだけのことを云ひ得る様になりたいものだ。

それには必ず第一の生命に立脚した慾を起さねばならない。成程前述の如く生命は實に短い、且何時果てるども人智で計り知り難きものである。併し察する所此の生命なるものは天が吾等人類に何事かを爲さしむべく授けられたものである。決して只むざくと我慾即ち慾の爲の慾にのみ此の貴き生命を消費してしまへどて授けたものではないと思ふ。

尚一つ吾人の感謝すべきことは吾等人類の爲に「神」といふ時間にも空間にも超越した偉大なる御慈悲が現はれ給ふて、勉勵せよ。精出せ。さうして貴き生命を利用せよ。汝が肉体は枯るるども、汝が生命は絶ゆるとも吾を信する一念だに有らば汝が上に無限の生命を與へてやろう。とかく呼び給ふのである。かうなればどうして生命をよく利用しないで居られよう。慾の爲の慾、我利／＼主義、現實主義ばかりにどうして生き長らへて居られよう。

今吾等人類の短い生命に無限の生命が繋つて居る、否授けられて居ることを悟つた時如何して目前の小利——其の小利を得てそれが死際に却つて自己を責むる種となる。——この詰らぬものを目標として前進することが出来るか、決して出来ないとと思ふ。

せめて此の永遠の生命に氣のついた以上あらゆる事即ち此の世の万事万端其の生命に根ざしてゆかねばならぬ。

かの二宮尊徳先生の言はれた言葉に『人間の人間たる所以は生命の永遠なることを悟りて行動するにあり』といふのがある。

人生を終りて遠き彼岸に旅立たんとする刹那、過ぎ来し方を回想して觀察したならば吾等が進路の明かに示されて居ることが理解出来るであらう。

そして神の吾人に與へ給ふた所の貴き生命を尊重して有意義に使用すべき所以も明かに分るであらう。(完)

自己表現こそその形式

澤 效 一

人間の藝術性

蜘蛛が自分の巢を造り上げてしまふと最後に巢の中央の處に自分のサインをすると言ふことを何かの雑誌で讀んだ。

藝術が自己の内部情熱を發露せんとする意志、もつと手近に言へば自己の表現であるとするならば、此の意味で蜘蛛は立派な藝術家である。人生が嚴肅な創造の世界であるやうに、草叢の間に小さい生を營んで居る蜘蛛もやはり此の世は藝術の爲の世界である。およそ宇宙に存在してゐる生物はすべて藝術家として生を受けて來たのである。

これを人間一個について考へて見よう。

先づ人間は生れ落ちて暗黒の時代から漸く物事に辨へが付く様になつて來ると、此處に愕然獨立した自己と言ふものを自覺する。そして外から何物にも犯されることのない此の個性を全く自分のものとしてこれを左右するの權力を自覺する。すると彼は其の權力でもつて自己を表現しようと所有する方法を考へる。

併しそのうちでも未だ幼少の頃は大膽に自己表現をやるには餘りに力弱い。それ故に一步退いて表現するには割合に容易な詩歌の道、即ち歌ひたいと言ふ心持である。少年少女の十五六になる者は彼等の弱く美しい夢の世界を寫し出して歌はんがために文學を愛しようとするのである。

先日或小學校の若い先生からこんな事を聞いた『此の頃兒童に童謡を作らせて見るんだが、上級生になるに従つて皆こう悲しみを帶びたものを作る。そんなに小供の心はセンチメンタルに出来てゐるんだろうか』併し小供の心そのものはそんなにセンチメンタルなものではないと思ふ。もつと無邪氣な華かなものであるのだ。けれどもそれが元元悲哀味の詩歌と言ふ方法を以て自己の内部情熱を表現しようとするから、勢そんなり持でなくとも悲しいとか淋しいとか言はねばならんのだと思ふ。而もそうする事に依つてより美しい兒童の世界の表現が出來て来る理である。

善い藝術が美のみでなく真善美の凡てを抱擁すると言ふのも間違ひはないが要するにその主なる藝術の目的は美の創造にある。だから自己を最も美しく表現したい欲望の爲にやはり人々が美術を求め來るのは言ふ迄もない。

然し自己を表現する上に於いて最も原始的であり且つ力強いものは人々の服裝の上に表れて來ると思ふ。これは獨人間のみではなく獸類にも鳥類にも蟲類にもよく見かける事である。が併しこれが單なる低級な異性に對しての情慾の象徴であると言ふかも知れぬが、凡て生物の己を表現せんとする内部情熱に氣付くきづかけなるものは大抵は性の自覺より發すると思はれる。其處には藝術的分子が隨分含まれて居る筈である。

異性を抱擁して自分のものとする事に依つて異性の上に自己を擴げんとする。進んでは家族の上にそうして國民の上に更に全人類の上に己を表現しようとするのである。猶太國民の嘆はキリストの嘆であり、キリストの苦痛は猶太國民否世界人類總ての苦痛であった。かくてこそキリストは自己と言ふものを最も大きく表現した大藝術家である。

然しながら人は凡てキリストでなくとも、或は政治家として偉大な自己を創造し、或は文學に出でても、或は實業界に飛躍して自己を不朽の天地に築き上げるのもいゝ。各其の道の頂點に自分の理想を描いて置いてそれに自分がどれだけ近づき得られるか、一心に努力し、そしてそれを人生の終局まで續けて行くことにある。彼がどれ程の人間であつたかは、創造の人生に於いて藝術家としての彼の藝術品が如何なる程度のものであるかによつて知る事が出来るのである。

内容と形式

形式は内容と離ることの出來ない密接な關係を持つてゐる。そして表現する上に於いて形式が内容よりもより強い權威を有してゐる。如何に内容が道徳的善良であろうとも表に現れる其の人の身振行動を其の人の内容と何の關係なしに見ることは何人も許されない。外見と内實とが正反対の人はそれだけ人格的の缺陷があると言はねばならぬ。内容さへよければそれで好いと澄まし込んで居る世に所謂自稱天才は大きい馬鹿である。彼の嫌に天才振つてゐる處に既に彼は隠すこの出來ない醜惡をさらけ出してゐるではないか。それに氣も付かず所謂天才の不規律を以て天才を飾ろうとするなんて何と間の抜けた事であろう。

形式の打破、因襲の打破と言ふことが近年頻に唱へ出されて來た。新しい形式を建設せんが爲のそれが打破であるならばいゝが、唯々因襲形式の全く破棄せられてしまつた暁には彼等は何をもつて自己を維持し、正確な自己なるものを何の上に築き上げるであろうか。自己を表現せんとして所有する形式を打破し、却つて自己の立場を失つてしまふ愚物である。